



# 渡辺 莉央

RIO WATANABE

Close-up Interview

(5月号 表紙の顔)

## コロナ禍のなかでも 進化を続ける19歳

2年前の全日本選手権マスターズを17歳4カ月の史上最年少で制し、一躍脚光を浴びる存在となった渡辺莉央選手。コロナ禍で中止となった1年をはさんで今年見事に連覇を達成。その1週間前に行われたナショナルチーム選考会でもトップ通過を果たすなど、伸び盛りの19歳は、ジャパンのエースとして国際大会での活躍も期待される。  
(Photo:福地和男)

### 高校2年でブレイク

ボウリングを趣味としていた祖母に連れられて、幼いころからボウリングに親しんできた。

「小学校2年生のころに、ボールとシューズがセットになってリュックに入っているのを買ってもらいましたが、そのころはあくまでも遊びでした。うまくなりたいと思って真剣に取り組み始めたのは5年生のころです。エメラルドボウル(群馬県前橋市)のスタッフさんに教わっていました」

中学時代は、全日本中学選手権も3年間入賞できず全国的には無名だったが、高校1年生のとき全日本高校選手権で3位入賞を果たす。

「国体の代表になることを目指していましたが、群馬県の予選で落ちて、それが悔しくてすぐ練習しました。全国大会で表彰台に上るのは高校選手権が初めてだったので、まさか自分が?という感じでびっくりでした(笑)」

しかしそれが決してフロックではなかったことを、翌年の優勝で証明した。さらにその2カ月後の福井国体でも個人で優勝、団体で4位に入った。

「国体はずっと出たかったので、やっと出られてうれしかったですね。また群馬県の代表というのを強く感じて、県のためにも頑張ろうと思いました。他の大会にはない雰囲気もあって楽しかったけど、高校選手権の優勝で周りからの期待も大きくなっていて、このときは優勝したいと思いました」

それまでの優勝は、同年代の選手を相手の優勝だったが、勢いは止まらず翌年3月の年齢制

限のない全日本選手権のマスターズをも制してしまふ。

「周りはすごい先輩方ばかりだったので緊張したけど、とにかくマスターズ戦を投げられるのがうれしくて、終始楽しく投げられました。それにしてもこの年、何かを変えたとかもなく、なぜ急に成績が出たのか、自分でも不思議でした」

### コロナ禍での大学生活

高校最後の年は、ジャパンオープンの優勝決定戦で松永裕美に敗れて金星は逃したものの、準優勝で文句なしのベストアマに輝いた。プロテスト受験なら1次テスト免除の資格が与えられるが、地元の上武大学への進学を選択した。

「地元を離れる気持ちはなくて、ナショナルチームの先輩でもある宮澤拓哉クンの卒業と入れ違いになりましたが、あとを追う形になりました」

しかし大学生活は、コロナ禍で大混乱のなかでのスタートとなった。

「入学式もなく、授業が始まったのは6月でした。ボウリングも、自粛期間中の1カ月はもちろん、大会がいつ行われるのかもわからない状況で、モチベーションが下がって、半年間ぐらいはほとんど投げっていませんでした」

10月31日から11月2日まで、三重・津グランドボウルで行われた国体リハーサル大会でもある全国都道府県対抗が、久しぶりの試合となった。宮澤拓哉選手と組んだダブルスは入賞を逃したが、個人(選手権者決定戦)は、宮澤選手とともに男女アベック優勝を飾り、群馬県の初の総合優勝に貢献した。

「そこからは結構試合が再開されるようになったので、次の試合に向けて目標を立てながら練習をすることができました。とくに年が明けてからは、3月のナショナルチーム選考会と全日本選手権に向けて練習を重ねましたが、あっという間に時間が過ぎて、気づいたらもう選考会なの...という感じでした」



「新しい友達もできて楽しいです」と、コロナ禍にも負けずキヤンパスライフも謳歌中

### 全日本連覇に成長を実感

2021年度全日本ナショナルチームメンバーは、選考会の成績だけで選ばれたが、32Gを6883ピンでトップ通過、それまでのユースナショナルチームからナショナルチームへと無事スライドを果たした。

「トップ通過は狙っていませんでしたが、難しいレーンだったのでとにかく必死でした。妹の希哩もユースナショナルに入れたので、いつも応援してくれている両親に、ふたりでいいところを見せられるように頑張ろうと話しています。最近は妹も大会で上位になるようになって競うことも増えてきたけど、まだ負けません(笑)」

その1週間前であった全日本選手権のマスターズ戦でも、大会新記録となる2833(12G)を打って、連覇を達成した。

「2年間ナショナルチームと

して活動させてもらって、またボール契約(サンブリッジ)もさせていただいて、いろいろ学ぶことが多く、それを生かしたので、何も考えずに投げて“優勝しちゃった”という感じの2年前よりは、成長できたなと思います。でも、まだいいときと悪いときの波が激しいです。レーンが読めていない状況でも、ストライクが出たらそこをひたすら狙って投げている感じなので、なぜそうなるのかを考えながら投げられるようになれば、もう少し安定してスコアを出せるのかなと思います」

ももとはプロ志向が強かったそうだが、今はナショナルチームでの活動にもやりがいを感じている。

「ナショナルチームに入って活動させてもらっているうちに、国際大会でも頑張りたいなと思うようになりました。今はプロとナショナルチームの両方で活動できる道もあるので、大学を卒業するまでには、進路を決めたいと思います」  
(取材協力: パークレオン高崎)



わたなべりお / 2001年10月27日生まれ、群馬県出身。上武大学在学中。右投げ。競技歴9年。ナショナルチーム在籍:2019~2020年(ユース)、2021年~。主な成績:第42回全日本高校選手権優勝、第37回福井国体少年女子個人戦1位、第57回・第58回全日本選手権・マスターズ戦優勝、第49回全国都道府県対抗選手権・選手権者決定戦優勝、第20回アジアスクール選手権・4人チーム戦優勝

